

藤原京左京九条・十条三坊 整地土の土器

―耳成線第1・2次

1 はじめに

史跡大官大寺跡の西方を南北に貫く村道耳成線の拡幅工事に先立ち、明日香村大字小山の地で1980・1981年度に実施した発掘調査（耳成線第1・2次調査）では、南北330mに及ぶ大規模整地土（黄褐色土）層の存在を確認している。概要報告（『藤原概報 11』『同 12』）では、近隣地点（大官大寺第7次調査地点、耳成線第2次調査A地点）での調査成果を踏まえ、この整地土の広がりや東西でも300mを超えていることを指摘するとともに、その形成要因を舒明朝「飛鳥岡本宮」ないし斉明朝「後飛鳥岡本宮」の造営と関連づける視点を示している。しかし、この解釈は飛鳥の王宮が一貫して明日香村大字岡の地にあったとする現在の通説的理解¹⁾と抵触しており、敷設年代と要因については改めて検討する必要があるが生じている。

概要報告において、整地の敷設年代を7世紀第Ⅱ四半期ないし7世紀半ばと判断した根拠は、この整地土から出土した土器にある。既に一部を概要報告でも提示しているが、整地がおこなわれた時期を判断する上での鍵となる重要資料であることに鑑み、ここでは未報告分をあわせて紹介するとともに、改めてその年代的位置を考えてみることにしたい。

2 出土土器

整地土出土土器 整地土からの出土土器は、第1・2次調査分をあわせて整理用木箱に3箱ほどの量である。土師器の杯C・杯G・高杯・甕、須恵器の杯H・杯H蓋・杯G蓋・杯B・「かえり」を有する形式の杯蓋・高杯・平瓶・提瓶・甌・壺・甕等があり、杯類を中心に15点を図示した（図130-1～15）。1は土師器杯G。口径（実測値）は11.6cmで、口縁部残存率は約35%。器表面の摩耗が著しく不明瞭だが、内面から体部外面をヨコナデし、底部外面調整はオサエのみのようである。胎土はにぶい橙色で、石英粒と明褐色のクサリ礫の粒子を多く含む。2は土師器高杯Cの杯部。復元口径は14.5cmで、口縁部残存率は約15%。内面から口縁部外面をヨコナデした後、内面に一段放射暗文を施している。胎土はにぶい橙色で、

赤褐色のクサリ礫粒子や、微細な長石・石英粒を含む。注記の出土層位は「灰褐粘土」となっているが、1980年11月5日の調査日誌によると、「灰褐粘土」は黄褐色整地土直下の層であり²⁾、『藤原概報 11』では同一の層位からの出土品（5・7）を整地土出土品として一括している。3・4は須恵器杯H蓋。3の復元口径は11.8cmで、口縁部残存率は約15%。硬質の焼成で、器表面は暗灰色、割れ口断面は暗灰赤色を呈し、胎土は緻密。4の復元口径は11.8cmで、口縁部残存率は約10%。やはり硬質の焼成で、器表面はやや明るい青灰色、割れ口断面は灰赤色を呈する。2と同様、注記の出土層位は「灰褐粘土」。5・6は須恵器杯H。5の復元最大（蓋受け部）径は12.3cmで、蓋受け部残存率は約25%。ただし、焼け歪んでいるため、数値の信頼度はやや低い。硬質の焼成で、わずかに青みを帯びた灰色の胎土は、微細な長石粒を含むが緻密。底部外面に、逆時計回りでの回転ヘラケズリ痕跡を残す。6の復元最大（蓋受け部）径は12.5cmで、蓋受け部残存率は約20%。生焼け気味で、明灰白色の胎土には微細な石英粒を含む。器表面が摩耗しており、底部外面の調整は不明。7は須恵器杯G蓋。復元口径は10.2cmで、口縁部残存率は約25%。硬質の焼成で、胎土はわずかに青みを帯びた灰色を呈する。胎土には微細な長石・石英粒を含み、器表面には黒色のタール状吹出がある。頂部内面には、ロクロからの切離しに起因する歪みを修正するために加えた非ロクロのナデ痕跡が残る。8は壺蓋か。復元口径は10.4cmで、口縁部残存率は約25%。硬質の焼成で、灰白色の胎土には黒色粒子を含む。頂部には、外面に時計回りで回転ヘラケズリを施した後に鈕を貼り付けた痕跡、内面にロクロからの切離しに起因する歪みを修正するために加えた非ロクロのナデ痕跡が残る。9は「かえり」を有する形式の須恵器杯蓋。復元口径は15.4cmで、口縁部残存率は約20%。硬質の焼成で、長石・石英粒を多く含む胎土は、表面がわずかに青みを帯びた灰色、割れ口断面が灰黄褐色を呈する。『藤原概報 11』では床土出土として報告しているが、注記には1980年10月8日に整地土である「黄褐粘土」から出土した旨の記載があり、出土層位は整地土と判断して問題ない³⁾。10は須恵器杯B。焼成はやや甘く、灰色を呈する胎土には長石・石英粒を比較的多く含む。注記の出土層位は「灰褐粘土」。11は須

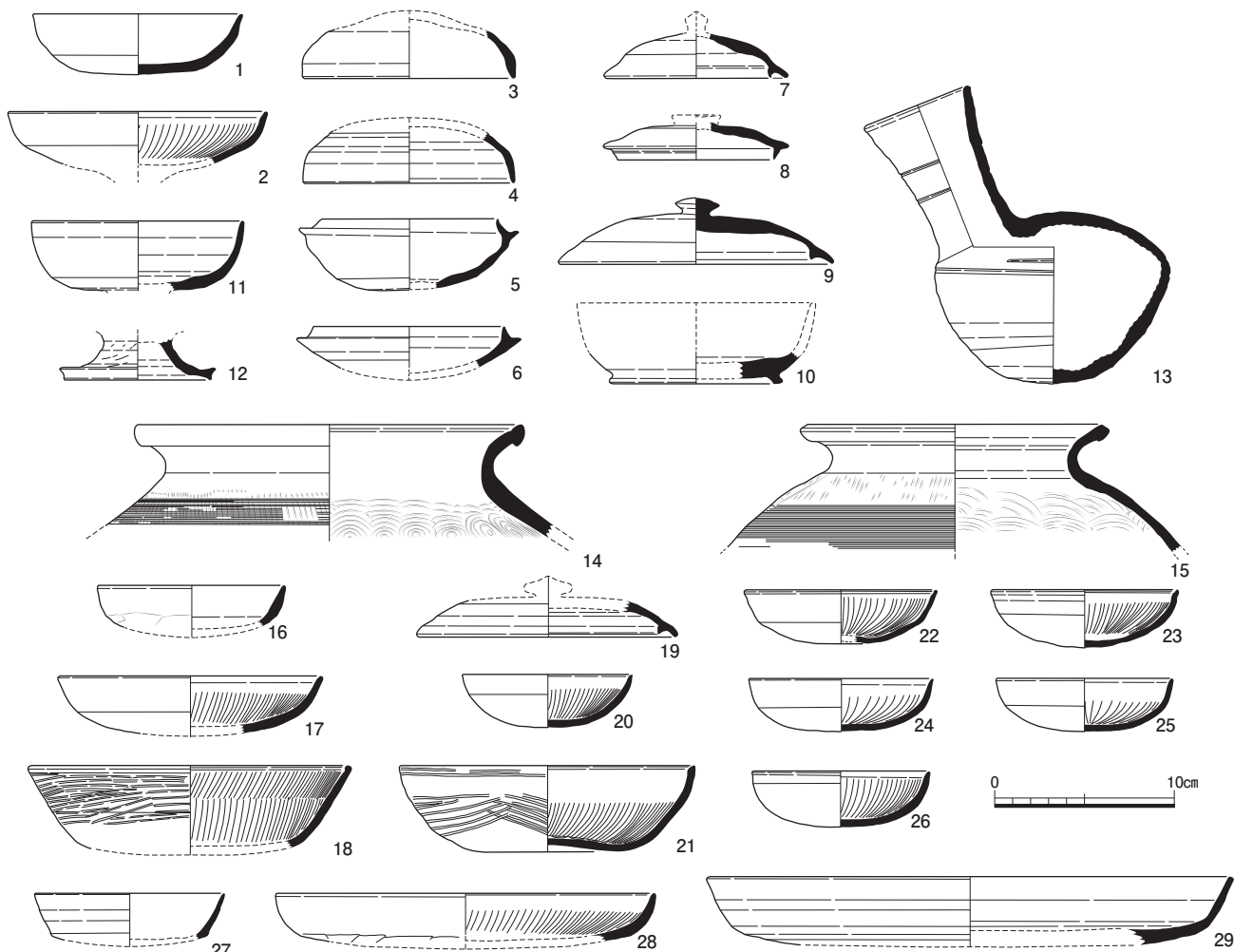


図130 整地土および土坑SK60・井戸SE95出土土器 1 : 4

恵器高杯の杯部。やや生焼け気味で、灰色の胎土には長石・石英粒を含む。脚部接合前の底部外面に、時計回りで回転ヘラケズリを施している。底部内面には、ロクロからの切離しに起因する歪みを修正するために加えられた非ロクロのナデ痕跡が残る。12は須恵器短脚高杯、もしくは趣など小型の袋物脚部。わずかに青みを帯びた灰色を呈する胎土には、長石・石英粒を含む。13は須恵器平瓶。硬質の焼成で、上面には焼成時に降灰が熔融した自然釉が付着する。灰白色で砂がちの胎土であることや、器壁にやや厚みがあることは、湖西窯産の特徴をよく示している。14・15は須恵器の小型甕。14は硬質の焼成で、灰白色の胎土は緻密だが、やや大粒の長石・石英粒を含む。胴部をタタキ成形後、外面肩部にカキ目を加えている。15も硬質の焼成で、暗灰色の胎土に長石・石英粒を含む。焼成時の降灰が厚く付着しているため、

胴部外面の成形・調整痕跡は不鮮明だが、タタキ成形後、肩部にカキ目と一条の線刻を施しているようだ(焼成前)。14・15とも、胴部内面に同心円文当具痕跡が残る。

整地土上面出土土器 16～19は第2次調査の際に「黄褐整地土上面」から出土したと注記のあるもので、調査日誌によると実際には整地土に少し食い込んだ状態で埋まっていたらしい。16は土師器杯H。復元口径は10.5cmで、口縁部残存率は約15%。器表面が摩耗しており不鮮明だが、底部外面にヘラケズリを施しているようである。胎土は淡橙茶色で、暗赤褐色のクサリ礫粒子を含む。17は土師器杯C。復元口径は14.9cmで、口縁部残存率は約15%。底部を欠くが、残存部から径高指数は23前後に復元できようか。器表面の摩耗が著しく、すこぶる不鮮明だが、内面に一段放射暗文を施しているようだ。胎土は濃橙茶色で、長石・石英粒を含む。18は土師器杯A。

復元口径は18.0cmで、口縁部残存率は約10%。器表面が摩耗していて不鮮明だが、内面に二段放射暗文、体部外側面には粗いミガキを施しているようである。胎土は淡橙茶色で、暗赤褐色の微細なクサリ礫粒子を含む。19は「かえり」を有する形式の須恵器杯蓋。復元口径は14.5cmで、口縁部残存率は約10%。やや生焼け気味で、灰白色を呈する胎土は長石・石英粒を含む。器表面が摩耗しているため明確ではないが、頂部外面に回転ヘラケズリを施している。

第1次調査土坑SK60出土土器 20～29は整地土そのもののからの出土ではないが、整地土と同質の黄褐色土で埋め立てられた遺構からの出土品で、埋立てが整地と同時期であるとすれば、整地土の敷設年代を考える上での参考資料となるものである。このうち、20・21は第1次調査SK60からの出土品で、いずれも土師器杯Cである。20の口径（実測値）は9.7cmで、口縁部残存率は約95%。内面から口縁部外面をヨコナデした後、内面に一段放射暗文を施しており、底部外面調整はオサエのみ。胎土はにぶい橙色で、赤褐色のクサリ礫粒子を含む。21は口径（実測値）16.4cmで、口縁部残存率は約90%。内面から口縁部外面をヨコナデした後、内側面に一段放射暗文、見込みに二重螺旋暗文、外側面に粗いミガキを施しており、底部外面調整はオサエのみ。胎土はややくすんだ橙色で、石英の微細な粒子を含む。

第2次調査井戸SE95出土土器 22～29は第2次調査SE95からの出土品で、SE95を検出した第2次調査区北部に整地土は遺存していなかったが、後世の河川氾濫により削平された蓋然性が高いことを概要報告で指摘している。22～26は土師器杯Cで、いずれも成形と器表面調整は20と共通する。22の復元口径は10.6cmで、口縁部残存率は約40%。ややくすんだ橙色の胎土には微細な長石粒を含む。23の口径（実測値）は10.5cmで、口縁部残存率は約75%。明赤褐色の胎土には微細な長石粒を含む。24の口径（実測値）は10.3cmで、口縁部残存率は約65%。胎土の特徴は22と共通する。25の口径（実測値）は9.9cmで、口縁部残存率は95%弱。24と同様、胎土の特徴は22と共通する。26の口径は9.9cmで、口縁部残存率は約50%。胎土の特徴は23と共通する。27は土師器杯H。復元口径は10.6cmで、口縁部残存率は約20%。器表面が摩耗していて不鮮明だが、外面底部にヘラケズリを施しているよ

うである。ややくすんだ橙色の胎土には、褐色のクサリ礫粒子を多く含む。28は土師器皿A。復元口径は21.2cmで、口縁部残存率は約15%。器表面が摩耗しており不鮮明だが、内面に放射一段暗文、底部外面にヘラケズリの痕跡が残る。胎土は明赤褐色で、微細な長石と石英粒を含む。29は須恵器皿A。復元口径は29.5cmだが、口縁部残存率が約10%であることに加え、かなりの焼歪みがあり、数値の信頼度は低い。やや生焼け気味で、灰白色の胎土には多くの長石と石英粒を含む。器表面の摩耗が著しいが、底部外面に逆時計回りで回転ヘラケズリを施した痕跡が残る。

3 出土土器からみた整地層の敷設年代

9・13・20～26を除くと小破片が多く、必ずしも保存状態の良い資料とはいえないものの、冒頭にも記したように、この土器群は整地土が敷設された年代を推測する上での重要な手掛かりである。そこで、いささか信頼度が低くなることは承知の上で、あえてこの土器群に検討を加えるならば、次のような特徴を指摘できる。

a 須恵器杯Hは、蓋・身とも口径12cm前後に集中しており（蓋11.8～11.9cm、身12.3～12.5cm）、数値的には飛鳥Ⅰの中相を示す山田寺下層（SD619・整地土）出土土器群（『山田寺報告』）に近い。

b 土師器杯Cは、整地土上面出土とされる17を除くと⁴⁾、径高指数が30前後に集中する傾向があり、数値的には飛鳥Ⅱの標式遺構である坂田寺SG100出土土器群⁵⁾や飛鳥Ⅱの新相を示す水落遺跡貼石遺構埋立出土土器⁶⁾、あるいは飛鳥Ⅲの標式遺構である大官大寺下層SK121出土土器群⁷⁾に近い。

c 須恵器杯B（10）とそれに対応すると考えられる口径の「かえり」を有する杯蓋（9・19）の存在や、端部が内側に肥厚した形状の口縁部を有する土師器杯A（18）の存在は、飛鳥ⅢないしⅣ以降の土器群に顕著な特徴である⁸⁾。

このように、飛鳥Ⅰ～Ⅴという編年の枠組みに位置づけようとする、視角によってまったく異なる上に、相矛盾する評価を下さざるを得ない。しかし、既に別の機会に指摘したように、飛鳥Ⅰ～Ⅴという土器様相の5区分を一概に年代差とみなすことは遺跡からの出土実態とそぐわず、とりわけ飛鳥浄御原宮期前後の土器群にその

矛盾が表出することが多い⁹⁾。かかる視点から、改めてこの土器群の特徴を吟味してみるならば、飛鳥Ⅰの中相という評価の根拠となった須恵器杯Hおよび同蓋の復元口径・最大径が、いずれも残存率25%以下の破片による信頼度の低い数値であることに、まずは注意を払う必要がある。なぜなら、一部の破片から口径・最大径を復元する際には、残存率が低ければ低いほど信頼度が低下するのみならず、実相よりも計測値が大きくなる傾向があるからで¹⁰⁾、aの評価にはそうした計測上の偏り（バイアス）が作用している可能性が高い¹¹⁾。これに対して、飛鳥Ⅱ～Ⅲという評価の根拠となった土師器杯Cの径高指数は、7個体とはいえ、すべて口縁部残存率40%以上の資料から算出された数値である。したがって、aよりもbの評価に重きを置くべきであることは明白であろう。さらに、先にも述べたように、飛鳥浄御原宮期前後には飛鳥Ⅱ～Ⅴの様相が土器群の性格によって複雑に交錯するという所見をふまえるならば、必ずしもbとcは矛盾する評価とはならない。

このように考えてくると、整地土が敷設された年代を考える上で重視すべきはbとcの所見であり、bで類似性を指摘した坂田寺SG100出土土器群・水落遺跡貼石遺構埋立土出土土器・大官大寺下層SK121出土土器群に現時点で付与している推定暦年代は、660～675年頃である¹²⁾。したがって、整地土の敷設年代は660～675年頃ないしそれをやや降る年代ではないかと考えられ、調査地点に関連しそうな当時の出来事を『日本書紀』の上で検索するならば、天武天皇2年(673)の「造高市大寺司」任命や同5年(676)の「新城」造営をあげることができる。そして、仮に「高市大寺」の存在を文武朝大官大寺の下層に想定する説¹³⁾をとるならば、耳成線第1・2次調査で検出された大規模整地土を「高市大寺」の造営にともなうものとする解釈も可能であるが、わずか3年の違いを論ずることはもはや土器による年代論の限界を超えている。また、「造高市大寺司」の任命にしても、「新城」の造営にしても、あくまで関連づけて解釈できるかもしれない出来事の候補でしかない以上、ここでは候補を例示するにとどめて、関連資料の増加を俟ち後考を期すこととしたい。

(尾野善裕／京都国立博物館)

註

- 1) 小澤 毅「小墾田宮・飛鳥宮・嶋宮―七世紀の飛鳥地域における宮都空間の形成―」『文化財論叢 Ⅱ』奈文研、1995。
- 2) 「灰褐粘土」は「黄褐色整地土」の南端付近(南区)で部分的(南北約3m)に確認できるに過ぎない。
- 3) 注記には、出土グリッド不明であることを示す「ZZ」の記載もあるが、調査日誌によると、この日は前日に重機掘削した中区で排水溝を掘っており、日誌に添付された略図からは、整地土(黄褐色土)と耕作土(黒灰土)・床土(灰褐土)との違いは明確に認識されていたことが読み取れる。
出土グリッド不明(ZZ)の注記は排水溝出土品だからであって、ことさらに整地土出土品であることを疑う理由はない。なお、『藤原概報 11』には他にも出土層位に関する誤植があり、整地土出土として報告した土師器杯H(18)の出土層位は、注記によるとその下層の暗青灰色粘土である。
- 4) 17を除いたのは、整地土上面という出土位置から、整地土敷設後一定期間が経過した後に、地表面に落ちていた土器が踏み込まれたものかもしれないことを考慮したからである。
- 5) 若杉智宏「坂田寺池SG100出土の土器群―坂田寺第1次」『紀要 2018』。
- 6) 奈文研都城発掘調査部考古第二研究室編「飛鳥・藤原地域出土飛鳥時代土器実測図集成」『飛鳥時代の土器編年再考』奈文研・歴史土器研究会、2019。
- 7) 西口壽生・玉田芳英「大官大寺下層土坑の出土土器」『紀要 2001』。
- 8) 前掲註2と同様の理由で整地土上面出土品(18・19)を除いたとしても、9・10の存在から「飛鳥ⅢないしⅣ以降の土器群に顕著な特徴である」という論旨に変更を加える必要はない。
- 9) 尾野善裕「飛鳥時代土器編年の再編に向けて―飛鳥・藤原地域を中心に―」『飛鳥時代の土器編年再考』奈文研・歴史土器研究会、2019。
- 10) 森川 実「土器の計測・計量と誤差(その1)」『飛鳥時代の土器編年再考』奈文研・歴史土器研究会、2019。
- 11) aの所見に対する評価に際しては、飛鳥・藤原地域で須恵器の産地構成が660～675年頃を境に、多様化していることを考慮に入れるべきかもしれない。これまでの研究で、7世紀における須恵器杯Hの口径縮小は、産地を越えて齊一的に進行しないことがあきらかになりつつあるからである(萩本勝ほか「討論会：7世紀の土器をめぐって」『古代の土器5-2 7世紀の土器(近畿西部編)』古代の土器研究会、1998。筒井崇史「飛鳥時代須恵器Hの地域性について」『京都府埋蔵文化財論集』第5集 京都府埋蔵文化財調査センター、2006)。杯H身の口縁部立ち上がりが高く、飛鳥Ⅰの杯H身より全体に扁平な印象が強いことは、この点に留意する必要があることを示しているようでもある。
- 12) 前掲註9尾野善裕2019。
- 13) 大脇 潔「国分寺と都城の寺院」『季刊考古学』第129号、2014。